

<その他 地域福祉を更に発展させるためにはどうすればよいか >

- 地域資源の健全な循環が必要(地域資源が疲れず、利権も生まない望ましい公共サービスのための資源の使い方)。
- コーディネーターの専門性強化が必要で、そこに国が支援する必要。
- 制度は新しく作るより、今あるものをどう幅広くできるか。制度外は無認可として悪者扱い。これらをよいものにしていくよう自治体にも一緒に考えてほしい。
- ご近所から組み立てなおすことで自治会の福祉部会が活性化する。
- 有償性を見直すなど(新しい)互酬性の仕組みを現実的に考えることも必要。

<地域福祉の役割>

- 地域福祉は、「制度外のニーズへの気づき⇒自発的实践⇒自治体でのプログラム化」の循環を起こすことが必要。
- 地域福祉の実践は、制度の枠を超えてきたもの。制度の中で収めるものと、外にあるものを一緒に考える必要がある。
- 困りごとは制度からはみ出る。そこに取り組み制度にしていく。制度でカバーされない部分を解決する仕組みを作り出すことが地域福祉では必要。

■「住民参加について」に関する意見

<なぜ地域福祉に住民参加が必要か>

- 「ちょっときて」で解決できることがたくさんある。
- 日常の顔のみえる関係づくりが災害時支援にも防犯にもつながる。
- 年をとると人間関係がしぼむ現実。それをみんなで支えること、子どものときから地域全体が関わることが必要。
- 住民は深刻な問題の前兆をつかんでいるので、住民の情報ネットワークにサービス等の情報が入っていけば、ルートにうまく乗らない人をサービスにつなぐことができる。
- 気がついた人が横につながることでかなりのことができる。
- 組織に入ると自由に言えないことが「ヒラの住民」同士のつながりでなら共有できる。
- 地域の中のコンフリクト(福祉施設の建設反対等)の解決から学び、それが(地域の)変化につながる。
- 地域福祉の問題の原点は、自治会町内会の形骸化など個人と社会をつなぐ中間集団の解体にある。NPOやボランティア等の新しい中間集団と自治会町内会とのうまい連携ができるとコミュニティの協働性が出来上がってくる。
- それぞれの地域には経験を通して地域で重ねてきた知恵というものがあるのではないか。
(「ソーシャル・キャピタル」、「ご近所の底力」)
- 福祉は連帯と信頼をつくることであり、連帯はソーシャルキャピタルの大きな要因のひとつ。
- 日本人がもともともっていたつながりの再構築が必要。古くから住んでいる住民中心から新しく住み始めた住民層を取り込む地域づくりが必要。

- 社会で活動することは、①生きがい、②職業で失った社会的ネットワークの新たな構築、③自分自身が培ってきた能力を生かすことにつながる。
- 行政の公共性を超えたもう一つのオルタナティブな公共活動が展開できる。
- 公平でないからこそその「温かさ」「多彩さ」「開拓性」「機動性」がある。
- ボランティアはやっていないという人でも、それはボランティアじゃないですかということがよくある(実はすでに活動している人がいるが自覚していないだけ)。

<住民参加の担い手とはどういう人か>

- ご近所での活動の主演は世話焼きさん(多くが女性)。ご近所を束ねたところに超大物世話焼きがいる。
- 地域では女性が活躍(男性支配の小地域活動は機能しにくい)。
- 介護経験者には地域活動で活躍できる人材がいる。
- 自分が子育てで苦しんで、その経験を生かしてあげたいというような先輩が後の人につなげる活動を推進するとよい。
- 役員は高齢化。子育て世代を巻き込むことが必要。ご近所力の起爆剤は次世代育成。
- 地域は天性主義。養成できるものではなく腕のある人を掘り起こすことが大事。
- 地域で担い手は誰なのかという問題。(最初に地域でネットワークをつくるのはPTA。狭義の福祉でない分野の人などいろいろある。)
- 地域活動の担い手として、無職からだけではなく常勤の仕事を持っている人がどう参加できるかも課題。
- 2007年問題は、改正高齢者雇用安定法で、それほど大きな退職者が出ていない。むしろ65歳からの2012年問題の方が大きい。